

# 艦

ひーらぎ  
illust 京極 燈弥

KANTAI COLLECTION  
Unofficial Fanbook

これ

モリ  
アル

side

榛名

KANGOSUKE MEMORIAL



# 艦これメモリアル

- side 榛名 -

ひーらぎ

表紙・挿絵／京極燈弥

## 【目次】

プロローグ	【006】
第1章 はにかみ days	【014】
第2章 こころ模様	【034】
第3章 Frost	【080】
第4章 クレイジークレイジー	【100】
第5章 minamo	【132】
エピローグ	【142】

## 〈登場人物〉

ていとく

### 【提督】

東京から鎮守府島へやってきた高校2年生の男子。  
鎮守府学園高等部2年1組に在籍することになる。  
島の間人からは何となく雰囲気がそれっぽい、という理由  
「提督」と呼ばれている。  
しかし本名とは全くかぶっていない。  
ちなみに本名は……。

はるな

### 【榛名】

鎮守府学園高等部2年1組のクラス委員長を勤めている。  
真面目でおしとやか、それでいて頑張り屋の明るい  
女の子。  
金剛、比叡、霧島との姉妹仲はもちろん、学園でも  
友達が多い。  
「榛名は大丈夫です」と事あるごとに口にする。

こんごう

### 【金剛】

鎮守府大学1年生で金剛型1番艦という名の長女。  
島で一番人気の女子だが、過去に彼氏を作った経験は無い。  
姉妹とのスキンシップとティータイムを何より大事にしている大人な女性。

ひえい

### 【比叡】

鎮守府学園高等部3年生であり水泳部部长。金剛型2番艦という名の次女。  
後輩を導くいい先輩でありながら、幼馴染のような距離の近さがあり同性からの人気も高い。

きりしま

### 【霧島】

鎮守府学園高等部2年2組クラス委員長。金剛型4番艦という名の四女。  
頭脳明晰でデータを元に動くインテリクラス委員長。と  
思いきや、絶対に怒らせてはいけない高等部の番長という側面があるという噂。  
クールビューティーなルックスから男女問わず人気が高い。

## プロローグ

深海棲艦との戦争はもう随分昔のこと――。

あらゆる兵器を投入し、多くの命が海に散っていった戦争の結末は思ったよりもあっさり終わりを迎えたらしい。

「えっと……深海棲艦との戦争を終結の際に結んだ条約とは、ねえ……」

東京湾を出航して何時間が経ったか。

低い位置にあった太陽は真上を過ぎようとしている。スマホの時計は十三時を示していた。いい加減、この退屈な時間をどうにかしたいんだけど……。

甲板へは僕以外誰もいないし、もっと突き詰めればこの船に乗っている乗客はスタッフを除けば僕だけ。

そりゃ暇にもなるわ。

「なんかないかな……」

船が出る前に渡された、これから行く場所へ付いて詳しく書かれたテキストを読むの

も飽きたし。というか役に立たない気がするし。

「こんなことならゲームでも持ってくるべきだったかな……」

溜息をついて、南国チックな椅子から起き上がる。日陰を作っていたパラソルから一歩出れば、海風が気持ちよく身体を撫でていく。

「あー、いい天気だ。いい天気だけ……」

何度か身体を伸ばして景色を適当に楽しんだ後はやっぱり暇だ。澁々テキストの続きに目を落とすけど絶対違う気がする。

今やるべきことじゃないのは間違いない。

だって例えば、映画なんかでよく見るシーンだと船に備え付けてある屋外プールを満喫するとか、船内ギャンブルで人生逆転を夢見てジャンケンを行うとか……。

いや、それはフィクションのことだからありえないだから仕方ないでしょう。

でもせめて！せめて、他にないかあるだろ!!

「ああ、もうやめだ！わからないことはわからない、常に自分に正直でいることが大事だって言うもんな。というわけで……」

これから向かう場所。

深海棲艦との戦争において新たな拠点として使われる予定で、それに伴い人型兵器を生み出したとか。そういう面倒なことがまとめられたテキストとはここでお別れだ。

テキストを看板のゴミ箱へ突っ込むと、余計なことから解放されたという喜びで、退屈感が少しだけ紛れた気がした。

「気がしただけだろうけど……。これから何するかなあ」

再び南国チックな椅子へ座ろうとした途端、広がり続ける水平線しか見えなかった景色に小さな変化が起きた。

「島……?」

遠目でしかわからないけど、間違いなく島だ。

「ここが目的地か……」

どれくらい大きいのか、そしてどんな人が住んでいるのか? 現段階でわかることと言えただだ一つだけ。

多分、僕たちの世代はもちろん軍関係者以外は関わったこともないだろう。

深海棲艦との戦争を終わらせるため、各国が研究の末に生み出し、実戦投入寸前まで話が進んだという、対深海棲艦用装備を扱うことができる女の子——艦娘たちが大勢住



んでいることくらいだ。

「どうしよう……『うわあ、男がいる。キモ、死ねばいいのに』とか思われたら」  
だって艦娘って女の子しかねないんだよ？

当然女社会になるわけだしそう思われてもおかしいことはなにも……。

「急に胃が痛くなってきたな……」

なんか船は島を捉えた途端急にスピードを上げたみたいで、身体を切る風が強くなった気がする。それまで控えめに鼻腔を付いていた磯の香りが口をしよっぱくさせた。

もうすぐまで迫った島を見つめていると、港の先へこちらをジッと見つめる女の子が立っているのに気付いた。

知らぬ間に目があったのだろう、僕へ向けて丁寧に頭を下げている。

歓迎してくれてるってことかな……。

「てか、あの子も艦娘？」

潮風に柵引く艶やかな長い黒髪を手で押さえ、今度は控えめに手を振られる。彼女が動いたびに巫女っぽい服の袖が優雅に踊っていた。

船が近づくことにはつきりしてくる彼女にどんな言葉をかければいだろう。

「まずは自己紹介だろ。それでえっと……自己紹介以外何話せばいいんだ？」  
こんな時、年齢×彼女居ない歴Ⅱな自分が悲しくなってくる。

「着いてしまった……」

まともに考える暇もないまま、船が港へ停泊した。

スタップの指示の元、実に数時間ぶりに陸へ降りた僕。

「お待ちしていました。あなたが新しくここで暮らす方ですね」

巫女服の彼女がゆったりした足取りで僕の前にやって来た。パツチリ開かれた両目が可愛らしく笑みを結ぶ。

「ようこそ、鎮守府島へ」

「あ、ああ……よろしく。わざわざ出迎えてくれてありがとう」

「いえ、これも私の役目ですから。私のことは榛名、とお呼び下さい」

「よろしく。僕の名前は——」

やばい、艦娘かどうかは置いといて、この娘なんでこんないい子なんだ？ 可愛いのに性格までいいって……とんでもないな。

何となく目を合わせてるのが気まずくて、意味もなく視線を下げてみる。

巫女服の胸元が大きく膨らんでいて、角度をどうにか頑張れば中身が見えそうだ……。  
本当に……。とんでもないな。

「……どうされました？」

「い、いやなんでも！ 榛名さんみたいないい人に最初に出会えてよかったなーなんて  
思ってただけだよ」

「榛名なんてまだまだですよ。でも、そう言っていただけで嬉しいです。提督」

「て、提督？」

「そう呼んでもいいですか？」

「い、いいけど、なんでまた……？」

「何となく、提督って響きが合うなーと思って」

「いいけど……僕、そんなすごい人じゃないんだけどなあ……」

でもまあ悪い気はしないけ……。

「まずは学校の方に案内させていただきますね。東京から鎮守府島に来る人ってあまり  
いないんです。だから学校では提督の話題で持ちきりなんですよ」

「へえ……。なんか変にハードルだけ上がってる気がするんだけど……」

「みんないい人たちですから。安心していいと思いますよ」

ニコリ、その笑顔を向けられた途端、今日からここで始まる新生活がより楽しみなものになった気がした。

重い荷物を肩に下げ、港に背を向けて榛名さんと共に歩き出す。

後ろから聞こえる船の汽笛は、そんな新生活の幕開けを知らせる音に聞こえた。

## 第4章【クレイジークレイジー】

1

十二月二十五日朝――。

昨日、半ば強引に榛名さんとのデートを取り付けたはいいけど、待ち合わせの時間は午前十時。

ちなみに今は八時を少し過ぎた頃だ。

「いくらなんでも早く来すぎたよな……」

待ち合わせ場所の駅前はクリスマス当日ではあるけど、これから働きに出る人でごった返していた。こういう光景は東京だろうと数百キロ離れたこの島だろうと関係ない。

まあ流石に駅の大きさや路線数は違うけどね。

そんなわけで、駅前広場にある噴水近くのベンチで色んな人が改札を抜けて行くのを

見続けていた。

「本当に来てくれるかな……」

みんなが見ている中で榛名さんも断れなかったんじゃないか？

結局榛名さんへ告白したあの男と同じことをしたんじゃないか？

昨日のことを思い出す度に嫌な考えばかりが頭に浮かぶ。

スマホで時間を潰そうとすると、

『へーい、提督。昨日話したことは覚えてるネー？』

タイミングよく金剛さんからメッセージが飛んできた。

『覚えてますよ。というかもう待ち合わせ場所にいます』そう返信すると一分もしないうちにメッセージの受信でスマホが震える。

『さすがに早すぎデース……』

『遅れたらどうしようとか考えてたら……。榛名さんはどうです？』

『それを聞くのはマナー違反ネ。でも霧島の読みが当たったみたいデスネ』

『読みって……榛名さんが当日になって行きたくないって言い出したってオチですか』

『提督が早く到着するって意味デース。寒くないですか？』

『寒いですよ。でも遅れるよりはずっとマシですから』

金剛さんへメッセージを送り、スマホの時計へ目をやる。まだ待ち合わせ時間まで一時間半もあることに苦笑して、冷たくなった手をコートのポケットへ突っ込む。

通勤ラッシュも山場を越えたのか、駅前は途端に人の通りが少なくなっていた。

こんな状態で後一時間半。いや、一時間二十九分……二十八分も待つのか。

「一回家帰っても余裕あるな……」

このままベンチに座ってたら風邪を引きそうなので、近くのファストフード店へ逃げよう。今なら空いてるはずだろうし。

そう思つて腰を上げた頃、噴水の向こう側。丁度僕がこれから渡ろうとしていた横断歩道を小走りで駆けてくる人影を見つけた。

動くたびにサラツと棚引く艶やかな黒髪を目で追うと、白い吐息を吐き出す彼女と視線が交差する。ほんのり赤くなる頬が笑みを作り——それだけで僕の中にあつた不安が溶けていく気がした。

「すみません。はあ……はあ」

片手へコートを抱えた彼女が息を切らせながら僕へ言う。





普段巫女服っぽい制服から一変した格好に中々言葉が出てこない。

薄手の白いジャケットの下へ着込んだ黒のワンピース。首元へ光るハートっぽい形のネックレスが彼女の呼吸へ合わせて小さく上下する。そのまま視線を下へ動かすと僅かに膝が透ける黒タイツとブーツが目へ入った。

可愛い、綺麗、大人っぽい……。

そういう感想が出てきては、上手く声に出せず喉と口の間で泡のように消えていく。

「どうされました？」

「え、えっと……」

「お、怒ってますか？ て、提督のことお待たせしてしまいましたもんね」

でもそうじゃない、今言うべき言葉は……。

「おはよう、榛名さん。怒ってないよ……まだ一時間くらい余裕あるのに走って来たのに驚いて……」

「そういうことですか」

ふう、榛名さんがはにかみながら呼吸を整える。「やっぱり寒いですね」榛名さんが抱えていたクリーム色のコートへ袖を通し、白い息を吐く。

「お姉様が提督と連絡してるのが見えて……もう待ってる事を知って。急いで来たんです……もうお家から走りましたよ」

「榛名さんが来なかったらどうしよう……とか考えてたら落ち着かなくてさ。昨日も結構強引に約束しちゃったし」

「提督」

僕が自重するように笑っていると、急に榛名さんが真剣な声で言った。彼女へ身体を向けると、ジーツとこちらを見つめている。

「提督？ 榛名をそんな女だと思っただけですか？」

「……え、えっと」

「約束はちゃんと守ります。それも提督との約束ですから。尚更守るに決まっています」  
「だって僕、一度榛名さんに振られてるし」

その心配もあったけど、榛名さんはそれを否定するように僕の手を強く握った。すっかり冷えた指先に、本当に僕のために急いでくれたことが伝わってくる。

感謝も込めて、体温を届けようと少し強めに握り返す。

「榛名、提督に酷いことをしました。艦娘のことを怖がらない……誰かを利用しような

んて考えない提督に……金剛お姉様たちを狙ってるなんて。提督を悪者にしたようなことを考えて……」

「そういう奴からラブレター貰ったばかりだったし。僕も昨日断りにくい場所でデートに誘ったんだ。お互い様だよ」

「……昨日は恥ずかしいし、委員の人に裏でいろいろ聞かれるし……大変だったんですからね、もう！」

顔を真っ赤にした榛名さんが僕の手を握ったまま改札へ歩き出した。前のめりになる僕が追いつくと、

「だから今日は楽しくないとダメなんです。それと、榛名に恋を教えてくださいさるんですよね、提督？」

「が、頑張るよ！」

「期待してますからね。じゃあ行きましようか

榛名さんが柔らかな笑顔を浮かべた。

『よろづ屋本舗』  
明暗異色のライトノベル販売サークル

# 艦これメモリアル

- side 榛名 -

ひーらぎ  
表紙・挿絵／京極燈弥

**C95 コミックマーケットで頒布予定！！**

『よろづ屋本舗』のホームページで詳細等はお確かめください！

『よろづ屋本舗』



<http://yorodukatudousi.dou-jin.com>

本やサンプルの感想、ご意見等も歓迎です！  
ホームページや著者の Twitter 等に送っていただければ幸いです！

サークル代表：黒ねこ作 (@gretelproject)

# 艦これメモリアル

## - side 榛名 -

発行者：よろづ屋本舗

HP：<http://yorodukatudousi.dou-jin.com>

Eメール：[yoroduyahonpo@gmail.com](mailto:yoroduyahonpo@gmail.com)

著者：ひーらぎ (@rag0311)

Twitter：<https://twitter.com/rag0311>

イラスト：京極燈弥 (@kyougokutouya)

装丁デザイン：船木渡 (船木同人ワークス)

編集：黒ねこ作 (@gretelproject)

これはサンプルです。完全版ではありません。

本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部または全部を無断で複製(コピー)することを禁止します。

また、この作品はフィクションであり、実在する個人、団体とは一切関係ありません。